

# イエスによる力の秘密

わたしたちの継続する弱さを通して働くキリストの力

ジョン・スティーブン・ライト著

[www.johnstephenwright.com](http://www.johnstephenwright.com)

## はじめに：公然の秘密

秘密とは力強いものなのです。

厳重に守らなければならない秘密があります。パスワード、セキュリティコード、機密情報などがそうです。一方、「公然の秘密」と呼ばれるものもあります。誰でもアクセスできる情報でありながら、最も恩恵を受けるべき人々にはほとんど知られていないものです。人生を変える新刊書、まだ発見されていない素晴らしい料理店、目の前に隠れている人生を変える真理のようなものがそうなのです。

これから探求する力の秘密は、公然の秘密なのです。その情報はイエスから直接来ており、すべての弟子たちが利用できるものです。しかし、わたしたちの実際の経験の中ではほとんど知られていないままなのです。この力強い秘密は、イエスに従う者が学ぶことのできる最も重要で、最も誤解されている真理の一つなのです。

その秘密はこうです。神の力は、わたしたちの継続する弱さの経験を通して働くように特別に設計されているのです。弱さは続きます。無力感が残ります。それが神の計画だったのです。

ほとんどのクリスチャンは、神の力が来るとき、弱さを感じなくなるはずだと思込んでいるのです。神の力が強さ、能力、十分さを感じさせてくれると期待しているのです。しかしイエスは使徒パウロに、そしてパウロの証しを通してわたしたちに、まったく反対の真理を示されたのでした。この洞察は、神の力がどのように働くかについてわたしたちが自然に期待するすべてのことに反するものなのです。

これは、答えられない祈りに対する慰め賞ではないのです。これが、神がご自身の民に力を届けるための主要な設計なのです。

# 第1章 パウロの問題とイエスの解決

## 抜かれないとげ

コリント第二を書く約十四年前、パウロは自分が「肉体のとげ」（コリント第二12章7節）と呼んだものに悩まされていたのでした。これは文字通りの物理的なとげではなく、パウロの生活と宣教に苦痛と苦しみをもたらした、特定されない説明のつかない状態だったのでした。

パウロはもはやとげに耐えられない日を迎えたのでした。彼は三度続けて祈り、このとげを取り除いてほしいと切実に求めたのです。パウロは、深く傷ついた魂のみが祈ることのできる必死さで、キリストが与えてくださったすべての信仰をもって祈ったのでした。

しかし答えはありませんでした。安らぎもなく、変化もなく、ただ沈黙だけがあつたのです。

その失望を感じる事ができるでしょうか。パウロの混乱を感じる事ができるでしょうか。ここに偉大な使徒、宣教師であり教会開拓者、自らの宣教を通して奇跡的な癒しと解放を見てきた人がいたのです。それでも彼自身の救いを求める祈りは答えられなかったのでした。何も変わらず、とげは残ったままだったのでした。

パウロが答えられない祈りというこの経験を通して力の秘密を学ぶ必要があつたなら、わたしたちも同じように学ぶ必要があるのです。

神の力を理解する道は、しばしば継続する弱さの谷を通過して走っているのです。今日、困難、試練、苦悩、苦痛を経験しているなら、また変化を求めて祈っても来ていないなら、このミニ・ブックは特にあなたのためのものでした。

## イエスが語られる

そして転機が訪れたのでした。パウロはコリント第二12章9節にこう記しています。「そのとき、主はわたしにこう言われた……」

イエスがパウロに語られたのでした。

パウロが「そのとき、主はわたしにこう言われた」と記したとき、彼は「言われた」という動詞にギリシャ語の完了時制を用いたのでした。この時制は、何が起こったかを理解するために不可欠なのです。

ギリシャ語の完了時制は、過去に起こったが、永続的に有効な結果を生み出した行為を表すのです。ギリシャ語で完了時制を用いて「わたしは五十年前に家を建てた」と言うなら、それは半世紀前に建てた家が、今もなお建てた当時と同じ状態で立っているということを意味するのです。その家を建てた結果は変わっていないのです。

イエスは十四年前にパウロに力の秘密を語られており、イエスのことばの結果は、パウロが初めてそれを聞いたときと同じ有効性をパウロの中に維持し続けていたのでした。

これは永続的な、人生を変える啓示だったのでした。

イエスのパウロへのメッセージには、わずか十四のことばが含まれていたのです。これらのことばは、イエスによって、御霊の力によってイエスからそれらを聞き信じるわたしたちひとりひとりの中に、同じ永続的で日々の、生涯にわたる結果を生み出すことを意図されていたのでした。

## すべてを変える十四のことば

イエスが言われたことはこうです。「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れる」（コリント第二12章9節）。

イエスが意図されたようにこれらのことばを理解するのです。この宣言は二つの協調した陳述から成っており、それぞれが現在時制の重要な動詞の上に構築されているのです。

ギリシャ語の現在時制は継続する行為、連続するプロセスを表すのです。イエスが「わたしの恵みはあなたに十分である」と言われたとき、現在時制を用いて、ご自身の恵みが「常に十分な状態にある」ことを伝えられたのでした。これは来たり去ったりする恵みではないのです。時に十分かもしれない恵みではないのです。これは継続して、絶えず、確実にわたしたちのために十分さを維持する恵みなのです。

これはイエスの恵みについてのヨハネの記述を思い起こさせるのです。「わたしたちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた」（ヨハネ1章16節）。流れる山の川を思い描いてみてください。水は下り坂のダンスを踊りながら流れるに従って、常に新しい水と入れ替わり続けているのです。これがイエスの恵みが常に十分さをもってわたしたちに豊かに注がれる様子なのです。

第二の陳述は第一の理由を述べているので、「なぜなら」または「というのは」で始まるのです。イエスは「わたしの力は弱さのうちに完全に現れる」と言われたのでした。

ここでの動詞の意味は不可欠なのです。「完成する」または「完全にする」という意味です。現在時制の動詞として、継続する絶え間ないプロセスを表しているのです。イエスの力は継続的に完成されつつ、あるいは完全にされつつあるのです。

しかし、ここで注意を払わなければならないのです。「完全にされる」という動詞は受動態であり、動詞の主語（「わたしの力」）は、外部の働き手からそれを完全にする行為を継続的に受けているということを意味するのです。その能動的な働き手こそが「弱さ」なのです。

言い換えれば、弱さはイエスの力と特別な関係を持っているのです。弱さは、イエスの力を効果的に働かせることによってその力を完成させる力なのです。

弱さが存在するとき、キリストの力はその力を接続し届けるために必要な導管を持つのです。弱さがなければ、キリストの力はその全能性においては常に完全であっても、その届け方においては不完全なままなのです。

## 第2章 核心的洞察——弱さは神の設計

### 弱さ：力のための接続点

強力な発電機を思い描いてください。発電機があれば必要なだけの電力を生み出すことができます。しかし、接続コードやケーブルと差し込む受け口がなければ、その電力を届けることはできないのです。発電機の力は完全に準備ができていますが、流れるためには接続点が必要なのです。

*弱さこそが神の力の差し込み口です。弱さが接続点なのです。*

これが、この箇所についてのほとんどの教えが見落としている革命的な洞察なのです。

しかしイエスはまったく異なることを示されたのでした。イエスはパウロに、そしてわたしたちに、弱さは克服すべき障害ではなく、

*維持すべき接続点であると告げられたのです。神ご自身の力は弱さを取り除くことによってではなく、弱さを通して流れることによって最もよく働くのです。*

### イエスが言われる「弱さ」とは何か

「弱さ」と訳されているギリシャ語の単語は、弱さ、病弱、無力、病气など、幅広い意味を持っているのです。この語はイエスが癒された病んでいる人々を表すために、福音書の中に頻繁に登場するのです。

さらに、この箇所でパウロは弱さの同義語として他のことばも用いているのです。

- ・ 苦痛で彼を苦しめ、屈辱を与えたとき
- ・ 侮辱——攻撃的なことばによる暴力
- ・ 苦難——最も基本的なニーズが満たされない状況

- ・迫害——権利、自由、安全が奪われる経験
- ・困難——ストレスや困難な状況からの激しいプレッシャー

イエスが弱さによって意味されることは、内側にあるものであれ、外部の状況や条件にあるものであれ、わたしたちに対処する力や十分さの欠如を意識させ、キリストへの依存の感覚を高めるものすべてなのです。弱さはせいぜい不快感を、最悪の場合は激しい苦痛を感じさせるのです。

イエスご自身も、罪深い人間の性質のゆえに、わたしたちはみな神のみこころを行うことに関して弱いと言われたのです。「霊は燃えていても、肉体は弱いのです」（マタイ26章41節）。どれほど弱いのでしょうか。イエスは「わたしを離れては、あなたがたは何もできません」と言われたのでした（ヨハネ15章5節）。

それゆえわたしたちが経験するすべての弱さは、神への依存のリマインダーなのです。イエスの力が弱さにおいて働き、弱さがわたしたちの常態であるなら、イエスの恵みはわたしたちのために常に十分な状態にあるのです。イエスの力は、わたしたちのキリストへの絶え間ない必要に接続しているのです。

## 正さなければならない誤解

わたしたちのほとんどは弱さに対して一つの目標をもって向き合うのです。それを消し去ることです。とげを取り除き、病を癒し、争いを解決し、困難をなくすように神に祈るのです。神の力がわたしたちを弱く感じさせるのを止めてくれるはずだと思い込んでいるのです。

祈った後も弱さを感じ続けるとき、何かがおかしくなると結論づけしてしまうのです。

しかしこの枠組み全体が、イエスが言われた御力の働き方を誤解しているのです。

イエスは「十分に熱心に祈るか十分な信仰があれば、わたしの力はやがてあなたの弱さを取り除く」とは言っておられないのです。弱さは設計であって、障害ではないと言っておられるのです。

キリストの力が働くために、弱さは取り除かれる必要がないのです。弱さは残る必要があるのです。

## 第3章 イエス——弱さにおける力の最高の専門家

### イエスが言われたことを信頼できる理由

イエスは十四のことばの中で「わたしの」という所有格代名詞を二度用いられたのです。「わたしの恵み」と「わたしの力」です。この繰り返しのよって、弱さにおいて特別に働くというご自身の力の独自性を強調されたのでした。これは強さや資源や有利な状況を通して働く他の種類の力とは対照的なのです。

力と弱さの関係をこれほど深く理解している方はおられないのです。それはイエスの特徴の一つであり、イエスがわたしたちの完全な救い主である理由なのです。

### 力に関するイエスの専門性

イエスの力について、イエスは「天においても地においても、すべての権威が、わたしに与えられています」と宣言されたのです（マタイ28章18節）。「わたしの力」はすべての力を意味するのです。イエスは全能、すなわち全き力をお持ちなのです。イエスを離れて存在する力はなく、イエスの力より大きな力もないのです。

イエスをご自身のミニストリーを通して、他者への愛ある奉仕の中でこの力を常に示されたのでした。聖書の中で、イエスをご自身の益のためにその力を用いられた例は一つもないのです。イエスの力は神の愛のゆえに他者に仕えたのでした。

### 弱さに関するイエスの専門性

さらに注目すべきことに、イエスは弱さについて知るべきことをすべてご存じなのです。弱さの経験の深さと広さのゆえに、イエスだけが知ることのできる可能性があるのです。これもまた神の愛の表れなのです。

イエスはヨハネ5章19節で現在時制を用いてこのように言われたのです。「子は、自分からは何もすることができません。」イエスはこの真理をヨハネの福音書の中で特に、何度も繰り返されたのでした。イエスはわたしたちを描写するために用いられた同じ弱さを受け入れることを選ばれたのです。「何もすることができない」という弱さをです。

わたしたちは弱いので、イエスはわたしたちと同じものになられたのです。イエスのご自身の強さや主体性においては何も語らず、行わないことを、生涯の実践として選ばれたのでした。わたしたちの主は、父のみこころに完全に従い、ご自身の自己意志に対して完全に死んでおられたので、ご自身の計画に関しては継続的で自発的な弱さの状態で機能されたのです。

しかしまだあるのです。イエスはわたしたちと同じように、この罪深い、墮落した、壊れた世界に生きられ、罪とそれが人間関係に与える破壊的な影響からくるすべての弱さを経験されたのでした。イエスは決して罪を犯されませんでした。他の誰よりもはるかに深く他者の罪の影響を経験されたのでした。

イエスはすべての関係の中で、すべてのことばと行いにおいて、純粋な愛だけを注がれたのです。しかし同じ程度の愛を返されることはほとんどなかったのです。イエスのご自身の生涯を通じて、他の誰よりも不当に扱われ、憎まれさせましたのです。それでもイエスは無条件に愛し続けられたのでした。

愛は、自己中心的な人々で満ちたこの罪深い世界で何よりもわたしたちを傷つきやすくさせるのです。純粋に完全に愛すればするほど、傷つき、拒絶され、裏切られることに対してより傷つきやすくなるのです。

さらに、イエスの死は人間的に可能な限り究極の無力さの経験だったのでした。パウロは「キリストは弱さのゆえに十字架につけられた」と記しているのです（コリント第二13章4節）。ですから、あなたやわたしが経験するいかなる苦痛、悲しみ、弱さ、困難、苦難、苦しみ、傷、不当な扱

い、またはあらゆる種類の弱さも、イエスがすでに無限に大きな程度まで経験されていないものはないのです。

## イエスが弱さを受け入れられた理由

イエスはわたしたちひとりひとりへの深い愛から、わたしたちの脆さのあらゆる次元を経験されたのでした。イエスはわたしたちの無力さをご自身のすべての繊維で理解したいと望まれ、そこでわたしたちに出会う方法を正確に知っておられるのです。

これはまた、イエスにわたしたちを慰め、共感する真の力を与えるのです。イエスはわたしたちが直面することを経験されたのでした。

弱さをこれほど完全に個人的に受け入れるイエスの愛の中に、純粹な恵みがあるのです。

これは、*弱さそのものを通して働く力の秘密が、全能の力と完全な知識が考え出しうる最も親切で、愛に満ちた、思いやりのある解決策であること*を意味するのです。イエスを賛美します！

## 第4章 二種類の力——違いを理解する

### 変革する力

イエスの力がわたしたちの弱さの中で働く二つの異なる方法があるのです。この二つの違いを理解することが、イエスがパウロに示された秘密を把握するために不可欠なのです。

変革する力とは、弱さを瞬時に全き状態に変革する力なのです。これは奇跡的な力であり、パウロがとげを取り除く三度の祈りへの答えとして受けることを期待していたものなものでした。

変革する力は瞬時に働き、壊れているものを完全な全き状態に変えるのです。イエスが人々を癒されたとき、その人々は完全に健やかになったのでした。目の見えない人は地上で最高の視力を得たのです。足の不自由な人は完全な強さと協調をもって歩いたのでした。イエスは水を、これまで味わった中で最も美味しいぶどう酒に変えられたのです。

この力は本物なのです。イエスは地上のミニストリーの間を通じてこの力を継続的に行使されたのであり、新約聖書は使徒たちを通してこの力が働いた多くの例を記録しているのです。今日も神は祈りへの答えとしてこの力を行使してくださっているのです。

しかし、ほとんどの教えが見落としている重要な点があるのです。変革する力は例外であって、規範ではないのです。

なぜでしょうか。なぜなら変革する力はわたしたちを全き状態にし、それによってイエスの継続する力への最善の接続であるまさにその弱さを奪ってしまうからなのです。変革する力は目の前の問題を解決しますが、わたしたちをキリストへの依存に保つまさにその接続を断ち切ってしまうのです。

## 力を与える力——これが規範

力を与える力とは、弱さを感じ続けながらも神のみこころを望み、行動し、成し遂げる能力なのです。これがとげを取り除かれなかったときにイエスがパウロに約束された力なのです。これが、継続する弱さという現実の中を流れる力なのです。

パウロはコリント第二12章10節の最後の文で現在時制を二度用いることでこの真理を強調したのです。「私が弱いときにこそ、私は強いからです。」

最初の現在時制の動詞「弱いとき」は、弱さの継続するプロセスを強調するのです。わたしたちは弱いままです。わたしたちは内側に脆さの感覚を生み出す苦痛や不快感を感じ続けるのです。状況は変わらないのです。しかし、まさにその時、その弱さの状態において、わたしたちは神の力において同時に強いのです。

二番目の現在時制の動詞「強い」は、有名なギリシャ語の「デュナミス」を用いているのです。これは「行う能力」または「行動のための力」を意味するのです。

パウロはとげのゆえに弱さを感じ続けたのです。とげは決して取り除かれませんでした。しかしイエスの力を与える力は、パウロが弱さのただ中に留まり続けながらも彼を通して流れ、もし癒されていたなら彼にできたであろうすべてのことを行い成し遂げることを彼に可能にしたのでした。

パウロが主のみこころを行う能力は、とげによってもたらされた弱さにもかかわらず強められたのです。実際、継続するこの限界は変革する力にはできない方法で、イエスの力を与える力にパウロを接続し続けたのでした。

**弱くありながら強い**

これは非常に重要で深く直観に反するものなのです。わたしたちのほとんどは、神の力が働いているとき、何らかの具体的な形でその力を感じてを期待するのです。弱さを感じ続けるとき、力が無いと思いつんでしまうのです。神がわたしたちの祈りに答えず、必要を満たして下さっていないと結論づけるのです。

しかし、イエスの約束の全体の要点は、イエスがわたしたちが弱く弱さを感じながらも、わたしたちに力を屈けることの専門家であられるということなのです。わたしたちにとって霊的に最善なことは、キリストへの依存を意識し続けることなのです。

ピリピ4章13節のパウロのことばがこの現実を把握するのを助けてくれるのです。「私は、私を強くして下さる方（キリスト）によって、どんなことでもできるのです。」

ここでもまた、この節は継続する絶え間ない力を表す二つの現在時制の動詞を特徴としているのです。イエスによって強められることへの二番目の言及は、コリント第二12章9～10節と同じ力のことばを用いていますが、前置詞を加えることで、それが内側で対処する能力を与える力、すなわちわたしたちの内なる人、意志と思いにある力であることを教えてくれるのです。

パウロが「どんなことでもできる」と言ったとき、彼は異なるギリシヤ語の力のことばを用いたのです。文字通り「能力において強い」という意味で、高いレベルで効果的に行動する力を指しているのです。

パウロはピリピ2章13節で同じ現実を表現しているのです。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせて下さるのです。」どちらも継続しているのです。神は常にわたしたちの中で働いておられるのです。

神の力は、肉体的、感情的、または状況的に弱いままであっても、神のみこころを行うためにわたしたちの意志と思いを強めて下さるのです。

## 巧みな設計

イエスの力は、わたしたちの弱さを意識したまま、内側でイエスの力が働いていることを意識させずに、機能する能力でわたしたちの意志と思いを特別に活力づける独自の能力を持っているのです。

弱く感じることは、あなたが弱いということの意味しないのです。感じられなくても、イエスの力があなたの意志を活力づけているのです。感じることで弱く、機能することでは強くあることが同時に可能なのです。

弱さを残すことで依存を保つことに加えて、イエスはわたしたちを守るためにわたしたちの弱さの中にご自身の力を隠されていると信じるのです。

もしわたしたちに流れ込む全能の力の実際の大きさを覚えることができたなら、それによって吹き飛ばされてしまうことでしょうか。これは、三位一体がその栄光の輝きをわたしたちから覆われる方法と似ているのです。神の栄光の実際の現実を見ることができたなら、一瞬にして無限の光にさらされることで目が見えなくなり、滅ぼされてしまうことでしょうか。

この解決策は全く巧みなものなのです。

## 第5章 永続的な態度の変化

### 弱さへの自然な反応

パウロがイエスの秘密を聞く前、彼はとげに対してわたしたちがみな弱さに自然に反応するように反応していたのでした。この反応には何も間違ったことも珍しいこともないのです。それは単に人間的なものなのです。

弱さを経験するとき、わたしたちの自然な反応は理解できるものなのです。恥ずかしく感じ、他の人々から隠したいと思うのです。神にそれを取り除いてもらえるよう真剣に祈るのです。時に「とげ」は過去に失敗したために受けた罰や報いではないかと思い悩むのです。弱さが続くとき、神がわたしたちの祈りを聞いてくださっているのかどうか、信仰に何か問題があるのではないかと思い悩むのです。

この通常の人間的反応は、弱さを克服したり逃れたりすべきものと見るのです。しかしイエスはわたしたちにまったく異なる道を教えに来られたのでした。それは単に無力さから逃れるのではなく、その経験そのものを変革する道なのです。

### パウロの態度の変革

パウロはこのように記しています。「ですから、私はキリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦難、迫害、困難の中にいることを喜んでいきます。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」（コリント第二12章9～10節）。

これは単に知的なものではなかったのです。パウロの中で何かが永続的に変わったのでした。

パウロが経験した劇的な変化に注目してください。

- ・無力さと戦うことから → キリストのために脆さを受け入れることへ
- ・弱さを障害と見ることから → 接続点として認識することへ
- ・取り除かれることへの絶望から → 弱さの中での満足へ
- ・脆さへの恥から → 喜んで誇ることへ

弱さへのパウロの新しい態度は、彼自身の証しの中に埋もれた一つのことばに彼の目を開かせたのでした。「キリストの力が私をおおうために」と記したとき、「おおう」ということばは普通のことばではないのです。ギリシャ語では「エピスケーノー」、文字通り「テントを張る」、「幕屋を張る」という意味なのです。彼はまさに自分の手で感じることのできるものを描写していたのでした。キリストの力が彼の弱さの真上にテントを張り、まさにその場所を住まいとする。そういうことをです。このイメージは聖書に深く根ざしており、丁寧に展開するに値するものなのです。

## 天幕職人パウロ

古代中東の世界では、テントは一時的な避難所ではなかったのです。テントは家でした。テントは住まい、安心、家族の親密さを表していたのです。数え切れないほどのテントを手作りしてきたパウロは、テントを張ること、住まうこと、特定の場所に家を作ることが何を意味するかを知っていたのでした。

## モーセの力のテントの経験

このイメージは深い根を持っています。荒野のモーセにまでさかのぼるのです。偉大な幕屋が建設されるずっと以前、モーセは一つのテントを取り、それを宿営の外に張ったのでした。彼はそれを「会見の天幕」と呼んだのです。モーセがそのテントに出て行くたびに、驚くべきことが起きたのでした。

「モーセが天幕の方に出て行くと、民はみな立って、それぞれ自分の天幕の入り口に立ち、モーセが天幕にはいるまで、彼のうしろ姿を見守った。モーセが天幕にはいると、雲の柱が降りて来て、天幕の入り口に立ち、主がモーセと語られた……このように、主はモーセと、人がその友と語るように、顔と顔を合わせて語られた。」  
(出エジプト33章8～11節)

モーセはテントへ行ったのです。神はテントへ降りてこられたのです。テントはイスラエルの強さの中心には立っていませんでした。周辺に、意図的な依存の場所に立っていたのです。しかしまさにそこへ神は降りてこられたのでした。

この「宿営の外」というパターンは、その究極の成就まで聖書全体を流れているのです。ヘブル書の著者はその線を直接カルバリへと引いているのです。「ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみました。ですから、私たちは、イエスの恥辱を身に負い、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか」(ヘブル13章12～13節)。

十字架はエルサレムの外に立っていたのです。それは究極の弱さと拒絶の場所でした。しかしそこが、神の力が他の何もできなかったことを成し遂げた場所となったのでした。イエスの力のテントはわたしたちの能力の場所には張られていないのです。それはわたしたちの自己充足の宿営の外に、わたしたちの弱さの地点に立っているのです。そこでイエスはわたしたちに出会われるのです。モーセに出会われたように、カルバリで世に出会われたように。

## 力のテントへのダビデの切望

ダビデはこの同じ真理を理解していたのでした。詩篇27篇で敵に囲まれながらも、彼は自分を苦境から取り除いてくれるよう神に求めなかった

のです。神のテント、すなわち神の臨在がその真っ只中での安全の場所であることを認識していたのでした。

「私はただ一つのことを主に願った。  
私はそれを求めている。  
命のある限り、私が主の家に住むことを。  
主の麗しさを仰ぎ見て、  
その宮で思い巡らすことを。  
まことに、主は苦しみの日に  
私を仮庵にかくまい、  
天幕のひそかな所に私をかくまい、  
岩の上に、私を高く上げてくださる。」

**(詩篇27篇4～5節)**

ダビデが切望したのは今まで以上のものではなかったのです。彼の最も深い願いは、会見の天幕が表すすべてに永続的な構造を与えるような、より永続的なもの、神殿へのものでした。その切望はダビデが想像していたよりはるかに大きな成就へと前を向いていたのでした。

## 第6章 神がテントを張られる——永遠に

しかしなぜイエスの臨在は特別にわたしたちの弱さへと引き寄せられるのでしょうか。その答えは聖書の物語全体に書かれているのです。ダビデの切望は前を向いていましたが、その成就是誰も予期しない方法で来たのでした。

### わたしたちの間を歩まれたテント

ヨハネがキリストの受肉を描写したとき、彼は意図的にことばを選んだのでした。「ことばは人となって、私たちの間に幕屋を張られた。私たちはその栄光を見た」（ヨハネ1章14節）。ヨハネはイエスが建物に入ったとは言いませんでした。イエスがテントを張られたと言ったのです。

これは偶然ではなかったのです。会見の天幕は常に移動可能な住まいでした。神がご自身の民とともに旅の中に、固定された目的地で待つのではなく、その道のりの中に現れておられたのです。イエスも同じように来られたのでした。イエスは人々が訪れるために神殿に常駐してはおられなかったのです。ガリラヤの道を歩き、家に入り、湖を渡り、井戸のそばに座られたのでした。モーセが会見の天幕へと出て行ったように、弟子たちはイエスに直接近づくことができたのです。雲の柱がテントの入り口へ降りてきたように、神の栄光がイエスの中に見え、近づくことができたのでした。出エジプト33章の顔と顔を合わせた親密さが、今や肉と血において彼らの間を歩んでおられたのでした。

しかしヨハネ1章14節はまた神殿のこだまも伝えているのです。「わたしたちはその栄光を見た。」これはシェキナーのことば、すなわち奉獻のときに幕屋を満たし、献堂のときにソロモンの神殿を圧倒した栄光なのです。同じ栄光が今や一人の人の中に存在していたのでした。テントが肉となったのでした。

### 滅ぼすことのできない神殿

しかしイエスは幕屋のイメージを越えて、より永続的なものへと指し示されたのです。宗教的指導者たちが権威のしるしを求めたとき、イエスはこのように答えられたのです。「この神殿を壊してみなさい。わたしは三日でそれを建て直します」（ヨハネ2章19節）。ヨハネは明確に記しています。イエスはご自身のからだについて語っておられたのです。

これは一つの文章に新しい契約全体を宣言されたものだったのです。エルサレムの神殿は固定された場所でした。人々はそこへ旅をし、登り、そして去ったのです。その臨在は地理に結びついていたのです。しかしイエスは石と場所のあらゆる制限を超える神殿を告知しておられたのです。死と復活を通して、決して崩壊することなく、決して捕囚に連れ去られることなく、決して後に取り残されることのない神の臨在の住まいを確立されるのです。

会見の天幕は移動可能でしたが一時的でした。ソロモンの神殿は永続的でしたが場所に固定されていました。イエスはその両方なのです。永続的に臨在し、どこにいてもあなたとともにおられるのです。

## あなたがイエスの住まいの場所

そして今、イエスはよみがえりの臨在を通して、わたしたちをご自身の住まいの場所とされるのです。わたしたちは宿営の外のテントへと旅したり、エルサレムの神殿へと登ったりしているのではないのです。パウロはその驚くべき意味を把握したのです。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住んでおられる、神から受けた聖霊の宮であることを知らないのですか」（コリント第一6章19節）。

キリストの力のテントはあなたの弱さの特定の地点の真上に永続的に張られているのです。神の臨在の生ける神殿があなたの中に住まいを選ばれたからです。イエスはわたしたちの弱さを訪れるのではなく、そこに住まわれるのです。イエスはすでにそこにおられるのです。イエスの恵みはすでに十分なのです。イエスの力はすでに、今日あなたが抱えているまさにその弱さの中で完全にされつつあるのです。

モーセの宿営の外のテントから、ダビデの切望へ、ソロモンの神殿へ、ことばが肉となられたことへと続くその旅は、すべてここに到達するのです。あなたの弱さの地点に、イエスのよみがえりに支えられた臨在があります。壊れることなく、永遠にそこに留まられるのです。

## 第7章 秘密に生きる

### しなければならない決断

この真理を理解することはあなたに決断を促すのです。弱さから逃げるといわたしたちの自然な人間的反応は理解できるものです。しかしイエスはもっと良いものを提供してくださるのです。最も予期しない場所でイエスの力を見出す道です。

今まで通り弱さと向き合い続けるのでしょうか。それともパウロから学び、パウロの選択をするのでしょうか。キリストの臨在に覆われているまさにその場所として、喜んで脆さを受け入れるというパウロの選択をです。

パウロはその選択をしました。「大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」弱さそのものが良いからではなく、その弱さこそがキリストの臨在に覆われた場所だったからなのです。

これは癒しや安らぎのために祈ることをやめることを意味しないのです。イエスはすべての必要を持ってイエスのもとの来続けることを招いておられるのです。変わることは弱さの見方なのです。もはや神の不在や無関心の証拠としてではなく、イエスの力を与える臨在の住まいとして弱さを見るということなのです。

弱さを意識するたびに、新しい意識的な決断をすることができるのです。「ここにキリストの臨在が覆っている。ここにイエスの恵みが十分にある。ここでわたしはイエスの力を経験するのだ」と。

### どのような弱さのただ中で？

直接お聞きします。どのような弱さにおいて、どのように感じていても、機能するためにイエスの力を信じようとしているのでしょうか。

どのような具体的な弱さにおいて、今この新しい態度を実践しようとしているのでしょうか。

今この瞬間、イエスの臨在がどこであなたを覆っているかが見えるでしょうか。

慢性的な痛みや病気と向き合っているのでしょうか。圧倒的な経済的プレッシャーに直面しているのでしょうか。無力さと混乱を感じる難しい関係の中を歩んでいるのでしょうか。不安、うつ、または人生の重要な領域での失敗感と格闘しているのでしょうか。

あなたの弱さが何であれ、肉体的、感情的、関係的、状況的であれ、イエスの臨在はすでにまさにその弱さを覆っているのです。イエスの恵みはあなたに十分であり、イエスの力はそれを通して完全にされつつあるのです。

## 神の臨在とのつながり

少し時間をとって、あなた自身の生活について考えてみてください。最も弱さを感じる具体的な場所はどこでしょうか。

それは毎月座って請求書に向き合う机かもしれないのです。明細書の山、どうしても足りない予算、ノートパソコンを開くたびに心に沈んでくる気持ちです。その机こそイエスの臨在がすでに待っておられる場所なのです。イエスの恵みはその経済的プレッシャーのただ中に十分なのです。

それは寝床かもしれないのです。夜横になっても安らぎの代わりに不安な思いが始まるのです。会話の繰り返し、明日への心配、昼間よりもすべてを重く感じさせる闇です。イエスの力はその眠れない時間もあなたを覆っているのです。最も孤独で、最もコントロールを失っていると感じるそのただ中です。

それは特定の椅子かもしれないのです。配偶者や子どもとの難しい会話がいつも起きる椅子です。あるいは会議室の席で、自分の無力さが最も露わになる場所です。あるいは継続的な医療を受けている治療室です。

*弱さのあらゆる場所は、すでにイエスの臨在のただ中なのです。*

それらに名前をつけてください。具体的に。机。寝床。医院。ずっと恐れている会話。それぞれがすでにイエスの臨在に覆われているのです。

これがまさにパウロがしたことなのです。イエスが十四のことばを語られたとき、パウロはまだ見ることでできない未来への約束を受け取ったのではなかったのです。彼はすでに真実であることへの新しい目を受け取ったのです。とげはまだそこにありました。しかし今や彼はイエスの臨在がとげを覆っているのが見えたのです。彼が名前をつけたすべての弱さがキリストの臨在の場所となったのです。だからこそ彼は「大いに喜んで誇りましょう」と言えたのです。霊的なパフォーマンスとしてではなく、見ることを学んだ人として。

その机へ、その寝床へ、その椅子へ、その部屋へと歩くとき、パウロが学んだことばを言うことができるのです。「ここにキリストの臨在がある。ここでイエスの恵みがわたしに会う。ここでイエスの力が完全にされつつある。まさにこの無力さの中で、まさにこの場所で。」

## まだイエスに従っていない方々へ

これまでこの本の内容は、読者がすでにイエスを信じる者であることを前提としてきました。まだクリスチャンでないなら、自分の弱さと自分自身を救う無力さを受け入れることが、神との正しい関係の始まりなのです。

イエスは、自分に霊的な十分さがあると思っている人のためではなく、自分の必要を認める人のために来られたのです。イエスは「医者が必要とするのは丈夫な人ではなく、病人です」と言われたのです（マルコ2章17節）。霊的な弱さを、自分を神の前に正しくする無力さを、赦しと

変革への必要を認めることが、イエスの救いの力を経験するための第一歩なのです。

今この瞬間、救い主としてイエスを必要としていることを受け入れる準備ができていますでしょうか。もしそうなら、イエスに赦しを必要としていると伝え、イエスの愛に満ちた力を与える臨在に自分自身を委ねてください。このような祈りをする事ができるのです。

「愛する主よ、わたし自身の道を、わたし自身の力で生きようとする事に疲れています。わたしのすべての罪の赦しが必要です。ありのままのわたしを愛してくださりありがとうございます。どうかわたしを赦し、今わたしの人生の主となってください。あなたの忠実な弟子として、永遠に自分自身をあなたに委ねる決断をします。永遠にわたしを救ってください。わたしの心に入り、あなたの臨在の中で、あなたの力がわたしの弱さを通して働きながら、どのように生きるかを教えてください。あなたがなされることに栄光をお返しします。この祈りを聞いてくださりありがとうございます。アーメン。」

## 第8章 秘密を実践する

イエスの秘密を理解することと、日々それを生きることは別のことなのです。パウロの経験がわたしたちに教えているのは、イエスが十四のことばを語られた後、すべてが変わったということです。永続的にです。ギリシャ語の完了時制は、イエスのことばがパウロの生涯全体に続く継続する結果を生み出したことを示しているのです。

覚えておいてください。キリストの臨在はすべての弱さの地点を覆っているのです。しかしその覆いが単なる興味深い概念ではなく、あなたの日々の住まいとなるためには、実行計画が必要なのです。ここに三つの不可欠なステップがあります。

### ステップ1：イエスの十四のことばを習得する

*「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れる。」*

**(コリント第二12章9節)**

イエスのことばを習得し、それをあなた自身のものとするための三つの行動があります。

まず、好みの訳でイエスの十四のことばを暗記するのです。カードに書き、電話のリマインダーを設定し、毎日繰り返すのです。弱さが現れたときにすぐに使えるようにする必要があります。

次に、秘密を他の人に明確に説明できるようになるまで、このミニ・ブックを研究するのです。概念が完全に理解できるまで、ギリシャ語の動詞の時制を理解していくのです。

そして、常に適用するのです。弱さを感じるたびに、これらのことばを思い起こすのです。失望を中断させ、あなたを力の源へと向け直させるのです。

## ステップ2：あなたの具体的な弱さに適用する

パウロにはとげがありました。あなたにもあなたのとげがあるので  
す。秘密は実際の弱さに適用されるとき、本物になるのです。

現在の弱さを具体的にリストアップするのです。

肉体的なもの（病気、苦痛、制限）、感情的なもの（不安、うつ）、関係  
的なもの（難しい結婚生活、家族の争い）、状況的なもの（経済的問題、  
仕事のストレス）、霊的なもの（疑い、祈りのなさ）、性格的なもの（怒  
り、短気、罪との格闘）。

それぞれの弱さのために二つの祈りをするのです。

変革する力：「主よ、わたしの背中  
の痛みを癒してください。よう  
求め続けます。もし主が  
お選びになるなら、これを  
瞬時にやることができると  
信じます。」

力を与える力：「主よ、今日  
わたしを癒してください。か  
どうかにかかわらず、主の  
恵みは十分です。この弱さ  
を通して流れる主の力を  
求めます。痛みでイライラ  
するとき忍耐を、制限にも  
かかわらず責任を果たす  
能力を、苦痛の中でも主に  
仕える喜びを与えてくださ  
い。ここに主の臨在がわた  
しを覆っている場所があ  
ります。この弱さを感じる  
たびに、わたしを神の栄  
光のために機能することが  
できるように助けるため  
に、主の力がその中で働  
いていることを決して疑わ  
ないようにしてください。」

## ステップ3：共同体の中で分かち合い、機能を見守る

パウロは自分の弱さを公に分かち合ったのでした。あなたには適切な  
脆さを実践できる信頼できる関係が必要なのです。恵みを理解し、変革す  
る力と力を与える力の両方のために一緒に祈ることができる二、三人を見  
つけるのです。取り除くための祈りだけを分かち合うものではありません。

弱さにおいてイエスの臨在を認識することを学んでいること。そしてそこでもイエスの力の中で機能していることを分かち合うのです。

感情だけでなく、機能を探し求めるのです。疲れ果てながらも仕えた時、苦痛の中でも愛した時、疑いながらも信頼した時に気づくのです。これらがイエスのデユナミスが働いている証拠なのです。弱さを通してイエスの力が流れていることを認識するにつれて、似たような重荷を担っている他の人々を励ます力が備わるのです。「わたしの弱さも去っていないのです。しかし神の力は最もよく弱さを通して働くということを学んでいるのです」と。

イエスが示された力の秘密を実践することは、直面するすべての弱さにおいてイエスの臨在の中に深く引き込んでいくのです。弱さを新たに意識するたびに、この三つのステップを繰り返すのです。時を経るにつれて、この真理がパウロを変革したように、これらが第二の性質となっていくのです。

最後に、わたしたちの弱さを経験し理解するためにイエスが払われた代価を覚えておいてください。イエスはあなたへの深い愛からそれをされたのでした。弱さに接続することによって、あなたが神の栄光のために機能するために御力（デユナミス）を届けることができるようにするためでした。

よみがえりの力は墓場で働くのです……究極の弱さの場所で。

## キリストの臨在はすでにそこにある

覚えておいてください。イエスの臨在はすでにあなたの弱さの地点にあるのです。それを得る必要はないのです。先に強くなる必要もないのです。弱さそのものがイエスが住まわれる場所なのです。

イエスはそこにおられます。中に入り、イエスとともにそこに生きてください。

## 聖書参照箇所

### 主要テキスト

コリント第二12章7～10節（ESV）——パウロのとげとイエスの応答  
ヨハネ15章5節——「わたしを離れては、あなたがたは何もできません」  
マタイ26章41節——「霊は燃えていても、肉体は弱いのです」  
ヨハネ1章16節——「恵みの上にさらに恵みを」

### 補足テキスト

ピリピ2章6～7節——イエスが自分を空しくされたこと  
ヘブル4章15節——イエスがわたしたちの弱さに同情されること  
ヨハネ5章19、30節——イエスの父への依存  
列王記第一17章14～16節——エリヤへの日々の供給  
出エジプト4章10～12節——モーセの弱さと神の約束  
ダニエル3章17～18節——シャデラク、メシャク、アベデネゴの信仰  
士師記7章2節——ギデオンの削減された軍隊  
歴代誌第二26章16節——ウジヤの高慢  
詩篇119篇71節——苦しみが教師として  
ピリピ4章11節——パウロの満足  
ヨハネ黙示録1章10節——御霊に感じたヨハネ  
マタイ11章28節——疲れた者へのイエスの招き  
ヤコブ5章16節——互いに告白し合うこと  
使徒2章42節——初代教会の交わり  
出エジプト3章11～12節——モーセとともにある神の臨在

## 旅を続ける

この本で探求された秘密はパウロのとげから始まったのではないのです。

それは十字架で示されたのでした。

あなたの日々の歩みを形作るパターン——弱さにおいて完全にされる神の力、降服した依存の中に見出される力——は、イエスの死を形作ったのと同じパターンなのです。イエスは力によって勝利されたのではなかったのです。ご自身の力を保持されなかったのです。弱さを選ばれたのでした。パウロが記しているように、「キリストは弱さのゆえに十字架につけられた」のです。

そしてその弱さのただ中で、すべてが成し遂げられたのでした。

### イエスによる十字架

「イエスによる力の秘密」があなたに十字架のパターンが日々の生活においてどのように働くかを示したなら、「イエスによる十字架」はあなたをその源へと連れて行くのです。

この三十日間のデボーションは、四つの福音書から時系列順に、十字架前、十字架上、十字架後のイエスご自身のことばをたどるのです。それは一つの確信の上に構築されているのです。

イエスはご自身の死を解釈されるのです。

イエスは他の人々が十字架の意味を説明するままにしておかれなかったのでした。ご自身のことばで、ご自身のミニストリー全体を通して、イエスは何をしに来られたか、なぜそれが必要だったか、それが何を成し遂げるかを明言されたのです。「イエスによる十字架」はイエスに語らせるのです。

「わたしの力は弱さのうちに完全に現れる」と言われた同じ主が、「完成した」とも言われたのでした。

この二つは一緒に属しているのです。

[www.johnstephenwright.com](http://www.johnstephenwright.com) にて入手可能

## イエスによるよみがえりの主

しかし十字架は最後のことばではなかったのです。よみがえりがそうだったのです。

よみがえりの後の四十日間、イエスは弟子たちに現れ、聖書を解き明かし、倒れた者を回復させ、弟子たちを遣わし、目に見えない臨在の中での継続する生活に彼らを備えられたのでした。昇天の後、イエスは御霊を通して地上でご自身のミニストリーを積極的に継続されたのでした。

「イエスによるよみがえりの主」は、復活祭からペンテコステまでの五十日間それぞれのデボーショナルを提供するのです。四つの福音書と使徒の働きから時系列順に、イエスのよみがえりのことばをたどるのです。他の巻を形作ったのと同じ確信をもってです。

イエスはご自身のみわざを解釈されるのです。

弱さと力のパターンは十字架で終わらないのです。よみがえりはその究極の証明なのです。弱さの中で完全にされた力をお持ちの方は今よみがえり、続べ治め、臨在しておられます。あなたの必要の地点に永遠に臨在しておられるのです。

[www.johnstephenwright.com](http://www.johnstephenwright.com) にて入手可能

2026年復活祭の日曜日にアマゾンと [www.johnstephenwright.com](http://www.johnstephenwright.com) ウェブサイトにてリリース予定。



## つながりを保つ

イエスの生涯と教えに焦点を当てた今後の研究、デボーショナル資料、新刊情報を受け取るには、以下をご覧ください。

[www.johnstephenwright.com](http://www.johnstephenwright.com)

論争なし。神学的な雑音なし。聖書の中のイエスへの持続的な注目だけ。

ジョン・スティーブン・ライトは宣教師（日本）であり、著述家、教師、教会開拓者、牧師です。学術的および教会的な場でイエスの生涯とことばを長年にわたり研究し、教えてきました。彼の働きは、普通の信者が聖書に直接出会い、キリストを通して神の臨在のうちに住まう日々の中で成長することを助けることに焦点を当てています。

彼は四つの福音書から描かれた時系列的な物語である「ザ・ジーザス・サーガ」の著者であり、継続中の「神の栄光を仰ぎ見て」シリーズ、そしてイエスの生涯と教えに定期的に関わることを助けるように設計されたデボーショナル・プロジェクト「デイリー・ジーザス・ニュース (DJN)」の著者でもあるのです。

さらなる資料、教材、今後の出版物については以下をご覧ください。

[www.johnstephenwright.com](http://www.johnstephenwright.com)